

地下鉄サリン事件被害者とその御遺族

坂井 志満さんの手記

これまで気になるオウム関連の資料を詰め込んできたものの、開ける気持ちになれなかった大きなプラスチックケースを開けると、下から古い大学ノートが一冊出てきました。そのノートには、事件が起きた1995年3月20日の朝から夜までのことが、細かく3頁にわたり書き連ねてありました。胸がどきどきしながらも読み始めたらノートに目が釘付けになりました。

妹の坂井津那は地下鉄日比谷線沿いの会社に勤めていたのですが、事件当日、その会社から、出社していないが事件に遭ったのではないかと家族に連絡があり、9時頃から手分けして探し回りました。テレビではかなり早くから、60歳位の身元不明の女性がいることを放送していましたが、津那は50歳でしたからその女性が津那であるはずはないと思っていました。

しかし、その身元不明の女性に大学病院で「ミス エックス」と名前が付き、夕方、病院近くの警察署に運ばれたこと、その「ミス エックス」こそ、妹の津那であると知らされました。警察署の霊安室で確かに津那と確認して、呆然として立ちすくんだあの不安な、どうして良いか分からない気持ちを改めて思い出します。

そして、突然の苦しみのために電車を降りた津那の不安と恐ろしさを思うと、喉の血管がどくどくと脈打ち胸苦しくやりきれなかった事件当日のことを思い出しました。

1997年に出版された村上春樹さんの著書『アンダーグラウンド』についても、家族の一人から「407頁に出てくる女性は津那だと思う」と言われ、その1頁を読んだだけで怖くてその部分しか読めず、読める時が来たらいつでも読めるようにと手元に置きながら、時間が過ぎました。しかし、15年経ったこの機会にと読み始めたところ、クールな作家と思い込んでいた村上春樹さんの取材相手を思いやり、丁寧に接する優しさが、私の気持ちをすっかり穏やかにしてくれました。

そう感じたのは、重篤な女性被害者を取材した折のこんな記述です。

“もしよかったら、僕の手を握ってみせてくれますか？”「いい」と彼女は言った。(中略)彼女は私の手を、しばらくのあいだぎゅっと握っている。おつかいに行く子供が、「大事なものを握りしめるみたいに。”

また、最後の章「目じるしのない悪夢」には、この様な文章もありました。

“今更わざわざこんなことを言うのは馬鹿げているかもしれない。でも私は声を大きくして言いたい。「彼らは本当にそんなことをするべきではなかったのだ。何があろうと。」”

私は、今の社会がオウム信者を生んでしまったのではないかと悔やむ気持ちもありますが、この文章にはまったく同感です！

現在オウムは「Aleph」と「ひかりの輪」と「山田らの集団」に分かれています。オウム真理教と同じ教義を元に、サリン事件の当時を知らない若い人達を「救済」と称して巧みに勧誘し、年々信者をふやそうとしています。また、被害者への損害賠償も果たさず、とても不安で怖くなります。

信者達に、無鉄砲で怖いテロ事件を再び起こされないよう、観察処分をこれからも続けていって貰いたいと強く願っています。

(2024年10月記)

[過去の手記はこちら](#)